様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２０日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：22653118
研究課題名（和文）　教員養成大学における特別支援教育関連授業の実践的構築

研究課題名（英文）　Investigations of curriculum of special needs education for university students to be teachers.

研究代表者
滝口　圭子（Keiko TAKIGUCHI）
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：60368793

研究成果の概要（和文）：全国の教員養成系大学・学部における「特別支援教育関連授業」の開講実態に関する質問紙調査，また，三重大学教育学部における教諭免許取得必修科目「特別支援教育入門」に関する質問紙調査及びインタビュー調査を実施した。その結果，限られた授業時間数や少ない専任教員という種々の制約の中で「特別支援教育関連授業」が実施されている一方で，受講学生は「特別支援教育関連授業」を高く評価し，授業後の特別支援教育に対する興味関心も高まっていた。今後の課題として，国としての「特別支援教育関連授業」必修化の推進，大学における教科教育専門教員との連携推進，授業において必修とする内容の吟味と厳選が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The present study investigates the actual conditions of curriculum of special needs education in universities for training students to be teachers in Japan. The faculty members of teacher training university completed questionnaires. In addition, Mie University students who took an introduction to special needs education class completed questionnaires and some of them were interviewed. The results showed that the faculty members of teacher training university made an effort for students under various restrictions. Additionally, university students satisfied these special needs education classes and were more interested in these fields after the class. These results suggest that these special needs education classes have special importance or significance for training students to be teachers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	0	1,300,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,300,000	300,000	2,600,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育
キーワード：教員養成・特別支援教育・授業研究・カリキュラム開発・教育系心理学

１．研究開始当初の背景

平成 15（2003）年 3 月，文部科学省は，特別の場で行う「特殊教育」から，一人ひとりの教育的ニーズに応じて行う「特別支援教育」への転換を打ち出した。その後，平成 19（2007）年 4 月から本格実施を迎えた特別支援教育は，今や幼稚園から，小学校，中学校，高等学校等までのすべての学校で行われるものとなった（柘植・渡部・二宮・納富，2010）。そうした動きの中で，各種教諭免許取得に際して，「特別支援教育」に関する科目の必修化を検討する教員養成系大学及び学部も登

場してきた。小・中学校の通常学級において特別な支援を必要とする発達障害の子どもの割合が 6.3%※であるという調査結果（文部科学省，2002）を踏まえるならば，特別支援学校への赴任を目指す学生のみならず，幼稚園，小学校，中学校，高等学校の教諭免許を取得し，それぞれの学校種に赴任していく学生も「特別支援教育」に関する基本的な知識や態度を，ある程度習得していく必要がある。しかし，教員養成系大学及び学部において，どのような履修プログラムに則って授業科目を設置運営していくのかについてはほとんど議論されておらず，また調査研究も見当たらないという現状がある。

※平成 24（2012）年 12 月に文部科学省より発表された同内容の調査結果では 6.5%であった。

２．研究の目的

本研究の目的は，全国の教員養成系大学及び学部を対象とした質問紙調査を実施し，また三重大学教育学部 1 年次後期に開講される「特別支援教育入門」受講学生を対象とした質問紙調査及びインタビュー調査を実施することにより，「特別支援教育関連授業」の現状と課題を明らかにすることである。

３．研究の方法

（1）「特別支援教育関連授業」質問紙調査

調査時期：平成 23（2011）年 2 月

調査票の配付・回収：郵送法により，調査票回答もしくは特設サイト回答のどちらかを選択するよう求めた。

調査対象者：小学校教諭 1 種免許状の取得が可能な全国の 4 年制大学（国公立・私立）を対象とし，関連学部，学科，専攻の「特別支援教育関連授業」担当者宛に 222 部の調査票を郵送した。本研究における「特別支援教育関連授業」とは，①通常学級における発達障害を持つ子どもたちを対象とした教育に触れている，②特別支援学校・養護学校のみならず，幼稚園，小学校，中学校，高等学校等の教諭免許取得を目指す学生も対象としている，③学校種に関係なく，教諭免許取得希望者は必修である，という①～③までの特徴を全て持つ授業としたが，該当する授業がなければ，①～③までの特徴をより多く持つ授業について回答するよう求めた。回収率は 25.7%（57/222）であった。

調査内容：回答者のプロフィール，「特別支援教育関連授業」の開講形態（名称，開講時期等），15 回の授業内容（表 1 の項目について「1：全く取り入れていない」～「5：かなり取り入れている」），重点的に学ぶべき内容（表 1 から 3 項目選択），授業に取り入れている工夫，望ましい授業形態，授業実施上の困難（項目について「1：全くそう思わない」～「5：かなりそう思う」）等であった。

（2）「特別支援教育入門」質問紙調査

調査時期：平成 24（2012）年 2 月

調査票の配付・回収：平成 23 年度「特別支援教育入門」授業最終日に配布し，翌日，授業の課題レポートとともに回収した。

調査対象者：平成 23 年度「特別支援教育入門」受講学生であり，回収率は 88%（177/201）であった。

調査内容：回答者のプロフィール，授業に対する満足度（「1：満足していない」～「5：満足している」），特別支援教育に対する興味関心（「1：非常に低くなった」～「5：非常に高くなった」），今後実際に取り組みたいと思っていること，授業に取り入れて欲しい工夫，15 回授業の各回に対する興味（「1：全く興味を持たなかった」～「5：大変興味を持った」），より深く学びたいと考える授業内容（15 回授業から 3 項目選択）等であった。

（3）「特別支援教育入門」インタビュー調査

調査時期：平成 23（2011）年 2 月

調査対象者：三重大学教育学部 1 年次後期に「特別支援教育入門」を受講した経験を持つ 2～4 年生 27 名であった。

調査内容：「特別支援教育入門」に対する感想，オムニバス形式の授業について，授業後に自主的に取り組んだこと，学習が生かされた場面，授業で取り入れるべき内容，1 年生へのアドバイス等であった。

４．研究成果

（1）「特別支援教育関連授業」質問紙調査

①「特別支援教育関連授業」の正式名称：「特別支援教育概論」「特別支援教育総論」「特別支援教育論」「特別支援教育概説」「特別支援教育の理論と実践」等が挙げられていた。

②卒業要件としての位置づけ：約3割が必修，約2割が選択必修に据えていた。「特別支援教育関連授業」の必修化が容易ではない現状とともに，厳しい状況の中で必修化を実現した大学・学部の努力がうかがえる。

③受講学年及び開講時期：高選択率順に，2 年次前期（14.0%），1年次後期（10.5%），その他（10.5%），1年次前期（8.8%），2年次後期（8.8%）となっていた。専門の授業や実習が始まる前の1，2年次に開講する大学・学部が比較的多いようであり，2年次の介護等体験の事前指導を含む学部共通必修科目として開講し

ているケースも認められた。
④授業担当者数:高選択率順に,1 人(54.3%),2 人（12.2%），3 人（8.8%），4 人（7.0%）となっていた。半数以上が「特別支援教育関連授業」を 1 人で担当していた。
⑤授業担当者（大学）の所属先：高選択率順に，特別支援教育（45.2%），その他（17.8%），心理学（13.7%），教育学（12.3%），幼児教育（8.2%）となっていた。
⑥授業担当者（大学以外）の所属先：高選択率順に，その他（28.1%），公立特別支援学校・養護学校（18.7%），大学附属（付属）特別支援学校・養護学校（18.7%），発達障害関連民間団体（12.5%）となっていた。
⑦重点的に学ぶことが望ましい学習内容：23 項目（表 1）から順不同で 3 項目選択し，その理由も記述するよう求めた。選択者数が多かった 3 項目（図 1）とその理由を以下に示す。項目 1「特別支援教育の理念」（22/57 名）では「理念や歴史的経緯を踏まえない実践は不十分だから」「特別支援教育の理念を学ぶことは，全ての子どもの教育のあり方につながるものだから」という理由が，項目 10「自閉症スペクトラムの理解と支援」（19/57 名）では「まだまだ誤った認識を持った学生も多い」「通常の学級に在籍する発達障害のある子どもを象徴する障害であり，そうした障害の理解とそうした障害のある子どもと保護者への共感的理解がスタートと考えるから」という理由が，項目 17「小学校の通常学級における指導の工夫」（19/57 名）では「小学校に勤務した場合，ほぼ確実に対応を迫られることになるだろうから」「子どもに関わる仕事に就くなら，“障害（疑い含む）”と聞いて対応に不安や尻込みすることなく，ベストかどうかは不明でもベターな対応ができると知ってほしいから」という理由が挙げられていた。
⑧授業の工夫：選択者数が最も多かったのは項目 6「映像の紹介」（43/57 名）（$p<.001$）であり，項目 3「特別支援学校・養護学校教諭による講義」（18/57 名），項目 12「発達障害に関する疑似体験」（18/57 名）と続いた。その他として，「ほとんどの学生が小学校に入っているので，その経験と授業を結びつける往還型の展開」「発達障害の子どもがクラ

表 1　「特別支援教育関連授業」の 15 回の授業内容例

項目	授業内容	項目	授業内容
1	特別支援教育の理念	13	病弱・身体虚弱の理解と支援
2	特別支援教育の歴史	14	視覚障害の理解と支援
3	特別支援教育の制度	15	聴覚障害の理解と支援
4	発達障害を支える支援体制	16	言語障害の理解と支援
5	特別支援教育コーディネーター	17	小学校の通常学級における指導の工夫
6	個別の指導計画	18	中学校の通常学級における指導の工夫
7	個別の教育支援計画	19	幼稚園・保育所（園）における支援
8	LD（学習障害）の理解と支援	20	保護者の支援
9	ADHD（注意欠陥多動性障害）の理解と支援	21	専門機関との連携
10	自閉症スペクトラムの理解と支援	22	進学支援
11	知的障害の理解と支援	23	就労支援
12	肢体不自由の理解と支援		

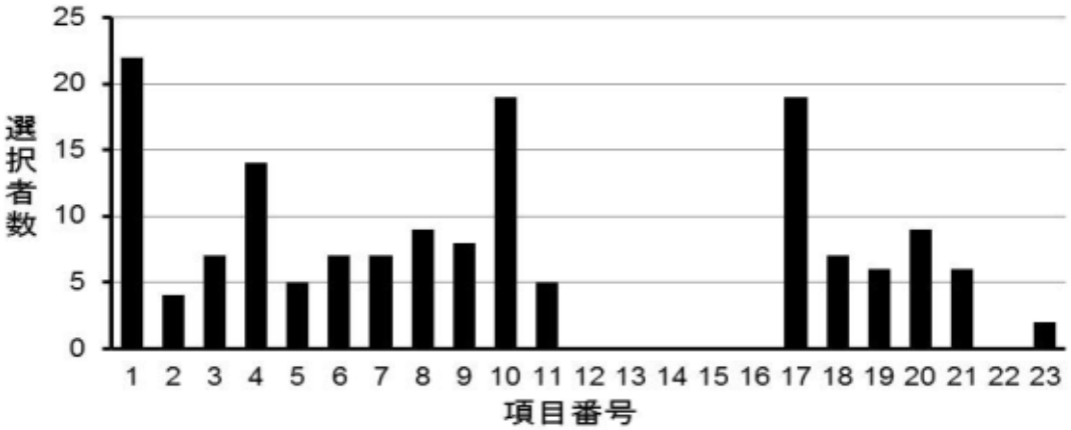

図 1「特別支援教育関連授業」において重点的に学んで欲しい学習内容（項目内容は表 1 参照）

スにいることを想定した模擬授業」「聴覚障害・言語障害に関する疑似体験」「ユニバーサルデザインの文房具紹介」「学生によるグループ討議」等が挙げられていた。
⑨より望ましい授業担当形態：「特別支援教育の専任教員が複数で担当」及び「特別支援教育の専任教員と他領域（他講座）の専任教員とが担当」の選択者数が，「特別支援教育の専任教員が1人で担当」の選択者数よりも多かった（$p < .001$）。「特別支援教育関連授業」の担当教員は，実際には1人であるケースが多いが，複数の教員で担当することがより望ましいと考えられているようだ。
⑩授業担当が望ましい領域・講座：より多く選択されていた領域は，「心理学」（20/24名），「幼児教育」（13/24名），「数学教育」（10/24名），「教育学」（10/24名）であった。「その他」には，「PT，OT，ST，ORT」「福祉関係」「当事者」「不要な領域は 1 つもない」「どの領域でも可。その道のプロの視点があるから。“できない”場合の指導の仕方，順序，多様性を指導してもらえたら」といった回答が認められた。
⑪授業実施上の困難さ：評定平均得点が高かった項目は，「実際に子どもと接することが大切である」（$M = 4.25$），「学生からの評価は高い」（$M = 4.05$），「15 回の授業では十分に教えられない」（$M = 3.66$）であり，対して得点が低かった項目は，「特別支援教育関連授業は必要ない」（$M = 1.18$），「学生に何をどのように教えればよいのかわからない」（$M = 1.71$），「学生が授業を真面目に受講しない」（$M = 2.09$）であり，本授業に対する学生の需要が確認された。一方で，座学学習の限界に関しては，各授業担当者が他の資源を様々に活用しながら総合的に対応していた。

なお，本質問紙調査については調査報告書を作成し，調査回答者及び希望者に配布した。

（2）「特別支援教育入門」質問紙調査

①満足度：評定平均値は4.15であった。
②興味関心：評定平均値は4.22であった。
③今後取り組みたいこと：「ボランティアに参加する」（89/177名）が他の8項目よりも多く選択されていた（$p < .001$）。
④授業に取り入れて欲しい工夫：「保護者による講義」（26/177 名）が他の一部の項目よりも多く選択されていた（$p < .001$）。
⑤15 回授業の各回に対する興味：「教室で気になる子の理解：アセスメント」の評定平均値（$M = 4.27$）が，他の一部の授業内容に対する評定平均値よりも高かった（$p < .05$）。
⑥より深く学びたい授業内容：「算数・数学の教育において特別な支援を必要とする子どもの指導について：算数・数学における“つまずき”から」（66/177 名），「教室で気になる子の理解：アセスメント」（60/177名）が，他の一部の授業内容よりも多く選択されていた（$p < .001$）。

受講学生は概ね授業に満足し，授業後の興味関心も高まっており，「特別支援教育入門」の開講意義を示しているといえよう。一方で，受講学生は，通常学級における子ども理解と具体的支援や教科別の指導方法に関する学習の機会の確保を望んでいた。教科専門教員と連携し，その協同体制をいかに確立していくのかという点は，大学という現場においても課題の一つといえるであろう。

（3）「特別支援教育入門」インタビュー調査

①オムニバス形式について：三重大学教育学部の「特別支援教育入門」は，15回の授業を15名の授業者で担当している。毎回授業者が交代するオムニバス形式の授業について，16名が肯定的な意見を，11名が否定的な意見を述べた。肯定的な意見としては「先生ごとに特別支援に対する思いが異なるが，それを知ることができる」「先生によっても考え方とか違うと思うので，いろんな角度から意見を聞けた方がいい」「例えば，T先生だったら幼児教育の障害に詳しい。小学校から高校まで，その専門の先生が話した方が，より詳しく聞けると思う」「1人の先生だと，つまらないと思ったら，授業が嫌になることがある。毎回先生が代わった方が，浅く広くにはなるが，1 年生の授業だし，特別支援教育の概要をつかむための授業ならそちらの方が新鮮でいい」というものがあった。一方，否定的な意見は「授業内容が重複する」「より深く話を聞きたい時にそれができない」「先生が固定していた方がなじみやすいし，知識が順番についていくと思う」「2人か3人ぐらいの先生で担当して，1，2回程度，実際の現場の先生を呼ぶシステムがいい」というものであった。「特別支援教育入門」授業担当者各自が，オムニバス形式授業のメリット及びデメリットを明確に認識することができれば，授業の具体的改善が可能になるであろう。
②授業後に自主的に取り組んだこと：自主的に何かに取り組んだと回答した学生はほとんどいなかったが，「それが大きなきっかけではなかったんですけど，卒論では特別支援に関すること。それは，実習が大きかったですけど，でもその時に特別支援入門で買った教科書はすごい役に立ちました」「ADHD とかLDに興味を持ったかもしれない。高校生の時

なんかは，たぶん知らなかったと思う。そういう授業がきっかけで，こういうのがあるんだなとか。それがきっかけでレポートを書く時に，ちょっと調べたりしました」という意見が得られた。授業後に取り組めることについては，学生に対していくらかの情報提供をしていく必要があるかもしれない。

③学習が生かされた場面：「間接的に授業内容が生かされていることがあったとしても，実感としてはない」という意見もあったが，全般的には，2 年次に実施される介護等体験において「不安が解消された」「アプローチとかが，ちょっとはわかった」「介護等体験の附属特別支援学校に行った時に，事前に知識が全然ないなと思った時に，授業を受けたなというのを思い出して，確か教科書を読んだような気がする」という意見が得られた。また，3 年次及び 4 年次に実施される教育実習において「発達障害のある子どもと接したが，その子が泣いても慌てずに落ち着いて見たり，声をかけたりすることができた」という意見が得られた。

④授業で取り入れるべき内容：「映像や写真など」「現場の先生の講義」「当事者の方が話してくれることは，ずっと続けて欲しい」「幼児教育専門なので，幼稚園での発達障害の子どもたちと先生との接し方を聞かせていただけたらよかった」「実際にどうすればいいとか，こうやってみればっていうのがいくつか挙がっていると生かしやすい」「実際にその子どもたちと関わりが持てると，もう少し具体的にわかるかなと思う」「特別支援コースの子と話したのはよかったので，その機会も。特支の子ってほかの子より考え方も違うと思うので，その子たちの話を聞く機会は欲しい」「1 年生で入ってきた時って，何をやるんだろうという感じでわからないし，興味がない子も多いと思うので，もうちょっと楽しくというか，外部の人が来た時みたいに，参加形式というか，学生に質問したりだとか，実際にこういう例があったというのを，映像で見せていただいたりするのも，たぶん面白いと思う」「理論ばっかり先生が言っても，たぶんあまり実感がないから，実例を出して，あなたならどう対応しますかとか，グループで話し合いをするとか，聞いているだけじゃなくて，主体的に学生がなれるような授業があったら」「みんなで話し合う時間は入れた方がいい。具体例とか，先生からの話に対して，みんなの意見とか，自分たちが今まで体験してきたこととかを話し合う。私は，周りの子に比べて結構触れ合う機会があって，小学校でも，中学校でも。もし，そういう子がいるなら，受講者にとっては自分たちの体験の方が，親近感とか，現実味とか抱けるかもしれない」といった意見が収集された。以上の意見をまとめると，「特別支援教育入門」受講学生は，動画や写真など視聴覚資料を使用すること，先生や保護者，当事者など実際の場にいる方々による講義を取り入れること，学生自身が課題への対応を考えたり，また自身の考えについて学生同士で協議したりするなど，学生が主体的に臨める機会を取り入れることを望んでいた。

以上の 3 種の調査結果は，全国の教員養成系大学及び学部における「特別支援教育関連授業」の実態を把握し，またそれらの授業の質の保障を推進する本邦初の基礎的資料であり，今後の有意義な活用が望まれる。

＜引用文献＞

文部科学省　2002　通常の学級に在籍する特別な教育支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査

柘植雅義・渡部匡隆・二宮信一・納富恵子（編）2010　はじめての特別支援教育：教職を目指す大学生のために　有斐閣

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①滝口圭子　未就園児保育の運営に携わる学生の 3-4 年次の意識の推移：テキストマイニングを用いた分析から　日本教育大学協会研究年報，31，3-14，2013，査読有

②尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉　大学・附属学校園における連携活動の検討：家庭科を中心とした実践事例から　金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要，5，45-53，2013，査読無

③滝口圭子・迫田里紗　幼稚園年中児クラスにおける歌唱指導：導入部に見受けられる保育者と子どもとのやり取りから　金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要教育実践研究，38，45-57，2012，査読有

④滝口圭子・吉村淳美　公立幼稚園における未就園児支援に参加する保護者の意識の推移：5，6 月期と 11 月期の比較から　幼年教育研究年報，34，27-34，2012，査読有

⑤富田昌平・滝口圭子・谷口美幸・小坂聡子　幼児による想像の現実性判断に見られる多視点態度性　心理科学，33，1-15，2012，査読有

⑥滝口圭子・寺田容子・柳優美・武澤友広・近藤武夫・磯部美良・落合俊郎　教育相談の一環としてのキャンプを通した宿泊学習の効果：発達障害のある児童を対象に幼年教育研究年報，33，55-64，2011，査読有

⑦滝口圭子・根津知佳子・後藤太一郎　幼稚園におけるウサギとの生活に関する実践的考察：歌「うさぎのうーちゃん」の協同的構成　三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，31，7-12，2011，査読無

⑧滝口圭子　教育学部学生の子ども観は所属コースにより異なるのか：大学1年生を対象とした質問紙調査　三重大学教育学部研究紀要，62，283-292，2011，査読無

〔学会発表〕（計13件）

①滝口圭子　教員養成学部4年間を通じた学生の子ども観の推移：所属コース間比較を踏まえて　日本発達心理学会第24回大会，2013年3月16日，明治学院大学（東京都）

②滝口圭子　特別支援における公立幼稚園と専門機関との連携はどこまで進んでいるのか：連携内容と連携頻度から考える　日本発達心理学会第23回大会，2012年3月9日，名古屋国際会議場（愛知県）

③滝口圭子・白川佳子・西川由紀子・田爪宏二・松本博雄　「保育の心理学Ⅱ」の実践的課題を考える：「演習」の質の確保のために　日本発達心理学会第23回大会（自主シンポジウム），2012年3月10日，名古屋国際会議場（愛知県）

④滝口圭子　教員養成大学・学部における特別支援教育関連授業の開講実態1：授業担当関連情報の分析　日本LD学会第20回大会，2011年9月18日，跡見学園女子大学（東京都）

⑤Keiko TAKIGUCHI The views of young children of faculty of education students: Comparison of first-year and second-year questionnaire findings from university students belonging to five courses. Pacific Early Childhood Education Research Association 12th Annual Conference, 2011.8.1, Kobe International Conference Center（兵庫県）

⑥滝口圭子　未就園児保育の運営に携わる保育者志望学生の課題意識の推移：反省会におけるグループディスカッションを経て　日本教育心理学会第53回総会，2011年7月24日，かでる2・7（北海道）

⑦滝口圭子・田爪宏二・中村涼・白川佳子・西川由紀子・松本博雄　保育者養成の今2：“保育の心理学”を創造する短期大学の挑戦　日本教育心理学会第53回総会（自主シンポジウム），2011年7月26日，かでる2・7（北海道）

⑧滝口圭子・寺田容子・宮本昌子・五里江陽子・松為信雄　発達障害の児童生徒に対する親の会との協働による短期型キャリア教育プログラムの実践Ⅰ：「よつばカフェ」参加者の「就労準備に向け必要なスキル」に関する自己評価の変化　日本LD学会第19回大会，2010年10月10日，愛知県立大学（愛知県）

⑨宮本昌子・寺田容子・滝口圭子・五里江陽子・松為信雄　発達障害の児童生徒に対する親の会との協働による短期型キャリア教育プログラムの実践Ⅱ：「よつばカフェ」を通した新たなコミュニケーションに関する指導方法・内容の模索　日本LD学会第19回大会，2010年10月10日，愛知県立大学（愛知県）

⑩西村優紀美・滝口圭子・森定玲子・田中和代・高橋知音・吉永崇史・斎藤清二・上野一彦　大学における発達障害学生への多様な支援の在り方　日本LD学会第19回大会（大会企画シンポジウム），2010年10月11日，愛知県立大学（愛知県）

⑪滝口圭子　幼児のテキスト理解における言語性ワーキングメモリと視空間ワーキングメモリの影響　日本認知科学会第27回大会，2010年9月17日，神戸大学（兵庫県）

⑫滝口圭子　未就園児保育の運営に携わる学生の意識の推移：テキストマイニングによる分析から　日本教育心理学会第52回総会，2010年8月29日，早稲田大学（東京都）

⑬滝口圭子・倉盛美穂子・田爪宏二・横山真貴子・中澤潤・秋田喜代美　保育者養成の今：心理学研究者が考えていること　日本教育心理学会第52回総会（自主シンポジウム），2010年8月27日，早稲田大学（東京都）

〔図書〕（計2件）

①滝口圭子，他16名著　北大路書房　0歳～12歳児の発達と学び：保幼小の連携と接続に向けて　2013，31-39.

②滝口圭子，他13名著　ミネルヴァ書房　新・プリマーズ発達心理学　2010，60-72.

６．研究組織

(1)研究代表者

滝口　圭子（Keiko TAKIGUCHI）
金沢大学・学校教育系・准教授
研究者番号：60368793